

休職や退職を余儀なくされた教員の悩みには、共通点がある。それはどうすれば子どもとのリレーション（心の交流）がもてるか、ということ。生徒に嫌われては商売あがったりです。それだけ「リレーション能力」は、教員のメンタルヘルス予防に関して重要なウエイトを占めているのです。

そこで、今回は性格特性等を除いた、休職しやすい教員の特徴について、以下の3点について述べたいと思います。

心が無防備なタイプ

中学校の30代女性教員（仮にK先生とする）は、生徒指導の場面で、男子生徒から「おい、このくそババア」と言われても

連載 一心の悲鳴に耳を傾ける

にこがしていた。「くそババア」といわれても腹が立たないのかよ。腹が立つなら俺を殴ってみろよ」と挑発してきた。思うにこの男子生徒、K先生の欺瞞性を見破ったのだと思う。それ以降、この女性教員はその生徒のことが怖くて学校に来られなくなってしまうた。

K先生のような教員の共通点は、これまでの生育過程の中で「申し分ない、いい子」で通ってきたそのパターンを、大人になってからも繰り返しているという点です。必要以上に人の思考を考えすぎて、言動を控えているのです。田舎なだけが取柄で、人をひきつけ

るものがない。生徒はそこをついているのです。言い方を変えれば、攻撃性の外向化が足りないともいえま。教員は、時と場合（例えば、命や犯罪に類するケース等）に応じて、瞬間的に「やめなさい」と自分を打ち出すことをためらわないことが大切です。このあたりの心の準備がないまま

や指導法に自信を持ちすぎ、生徒や保護者の要望にあまり耳を傾けなかったのではないかと、ということ。自分はプロフェッショナルである」との気概のもとに、へたをすると権威主義になる危険性がありま。子どもたちからみると、弱い自分をさらけ出すことをためらわない先生、他人

子どもとリレーションし 仲間と感情を分かち合う

部活の顧問による体罰事件や行き過ぎた生徒指導の問題等は、このあたりが原因になっている可能性が考えられます。

ま、「無防備の状態」で子どもと接している教員の中心に、子どもとのリレーションが不調に陥る要因があるように思います。自信は持ちすぎず

一つは、教育観や哲学に は学者並みの知識はあっても、その教育観や哲学を実践する技法（スキル）に ついての知識・経験不足。もう一つは、特定の教育理論や指導法を信奉し、ひとりのよがりをしている場合が考えられます。長年、獲得してきた知識や指導法に固執するあまり、気が付くと子

悩みを抱えるタイプの人はどんな人？

一方、職場においては、管理職や同僚と感情を分かち合えるとき「われわれ意識」が育ち、これが心理的安定感の根源になるのです。他人がどう思っているかわからないから、自分だけがこんな考え方をするのはと思ひ込み、孤独感にとられるのです。協力とは、同僚である、仲間であるという認識の上に成り立つものですから。

過去記事は <http://www.knews.co.jp>

執筆 土井一博（どい・かずひろ） 日本教職員メンタルヘルスカウンセラー協会（JPTHC）理事 長 川口市教育委員会学校教職員メンタルヘルスセンター